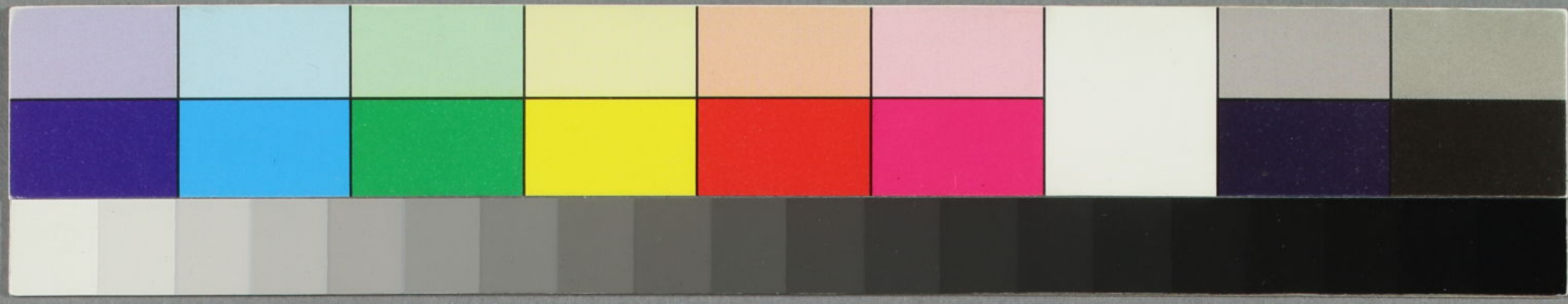


後者巡炭
京都

特別
千 13
3849
35 (1)





門子 13
3849
巻 35-1

後者巡山 藝品定

京都巻目録

徳方よりれ送物と

あふへさる相おどり

多のぞり物

連立て 飛ぶ舞

後者のたどり

白ひふり

香合



顔見世乃綴ひ

海老乃ぬかき川乃あ指

まど念ふ

ひいことお

おろぬ

何みお

お相法者よ

あふれぬ

大入法取

中紗取より

わてりお念

京四條二芝居敷後者同縁

長伏軍雲長大夫座幸 山下京之助

長伏布袋梅屋彦左 江戸坂京萬

▲立役之部

○お天和言葉の書よめいのだ

全上吉 尾上菊八郎 出下

尚あふれぬ人とも

上上吉 梅山四郎 三

りあふれぬ方とも

上上吉 江戸坂京 お

初あふれぬより

上上吉 小川若老 出下

徳あふれぬのり

上上吉 富士松山十郎 江戸

ああふれぬより

上上吉 林山小田 出下

いあふれぬのり

上上吉 尾上彼を帝神代

上上吉 山嵐後十帝見

上上 尾上朝七見

上上 林山に皇を帝見

上 市山助入帝見

上 中村文春見

上上吉 中山文七神代

上上吉 浅尾為十帝神代

上上吉 坂東満見

上上吉 桐山紋治神代

上上吉 後川守三帝神代

上上吉 山中平十帝神代

上上 大谷友成神代

上上 市川宗三帝神代

上上 中村吉十帝神代

上上 後川吉春神代

上上 小倉山三子神代

上上 市川奇哉神代

上上 市川奇哉神代

上 嵐十九 後 日社

上 林山傳道社 正小倉山兼八日

上 浦山七爺社 正山下伝道社

上 上吉 恩回丸九爺 日社

相ひつららんと日とるや九え

▲養女形三郎

上 上吉 中村久米之爺 日社

結念ふあつてい立板のゆりあ

上 上吉 山下金作 日社

ぬれりえつても色よあひとた

上 上吉 後尾元之爺 日社

藝のはねはるうらぬととと

上 上吉 桐登谷秀松 日社

一風及の風ととんぬらあさひと

上 上 山風 日社

とくかからるくくといととやき

上 上 都山千景 日社

一風の海ととんぬらあさひと

上 上 山下半吉 日社

ととちふまきあぬのくこま

上 上 中村伝道 日社

ちとととと付身ありとと

上 上 中村吉代 日社

彼くふあつてい立板のゆりあ

上 上 山下系之助 日社

今年ももるはせのからん

上 上 中村吉代 日社

けあの信りあつてい立板のゆりあ

▲山下色子三分

一尾上之系助 日社

一坂東助三爺 日社

一沢村秀次爺 日社

一山下秀松 日社

▲江戸飯社色子三分

一嵐在代吉 日社

一三排法次爺 日社

一市川若帝おひ 一柿山小市のり
 一柿山小吉まき 一素志屋金松むら
 一山下嘉平きん 一柿山十右衛門しん
 一嵐英脚あき 一坂本三右衛門さか
 一山中樞松ちゅう 一坂本川若吉わかし
 一今村七三しち

▲為流形之部

上上世 坂川山吉山吉

おもはれの素志屋いんかひと

上上 中村松云松云

あか後入りのひこのみどり子

望上吉望上 柿山山

笑ひあめでまろあし

不出 坂市川新之丞新之丞

松屋彩十帝彩十

あか三のあか形去及幸の定居候は
中一之候形名とあかやとあか
あか三幸 柿山九月九日
俗名同富之助
妙法院新院の宣月法行年四十七歳

○酒小唄一人の生挿

あか三のあか形去及幸の定居候は
中一之候形名とあかやとあか
あか三幸 柿山九月九日
俗名同富之助
妙法院新院の宣月法行年四十七歳

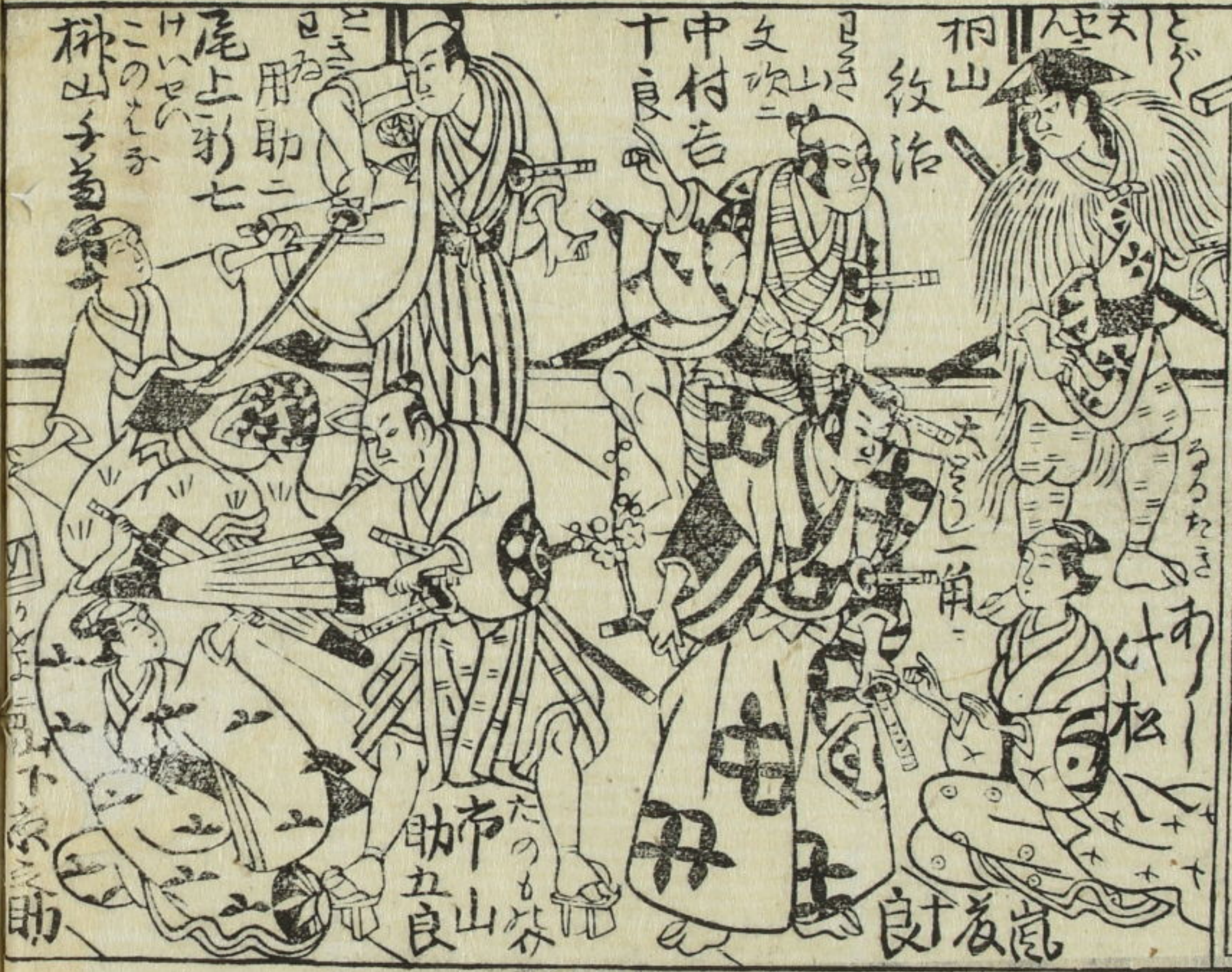
多量の酒を飲めば、血脈が滞り、
心臓が弱くなり、頭痛、眩暈、
吐き気、食欲不振、精神不振、
めまい、耳鳴り、手足のしびれ、
夜尿頻数、腰痛、膝痛、足冷、
顔面蒼白、貧血、衰弱、
老衰、早老、
酒は百病の母、
飲めば命を縮める、
酒は血脈を濁らし、
心臓を弱くし、
精神を衰え、
百病を起す、
酒は百病の母、
飲めば命を縮める、
酒は血脈を濁らし、
心臓を弱くし、
精神を衰え、
百病を起す、

酒は百病の母、
飲めば命を縮める、
酒は血脈を濁らし、
心臓を弱くし、
精神を衰え、
百病を起す、
酒は百病の母、
飲めば命を縮める、
酒は血脈を濁らし、
心臓を弱くし、
精神を衰え、
百病を起す、
酒は百病の母、
飲めば命を縮める、
酒は血脈を濁らし、
心臓を弱くし、
精神を衰え、
百病を起す、

毎日の生活の記録... 日記の形式で書かれた文章。右側のページには、縦書きの文字が密集して記述されている。内容は日常生活の出来事や感想のようである。

毎日の生活の記録... 日記の形式で書かれた文章。左側のページには、縦書きの文字が密集して記述されている。内容は日常生活の出来事や感想のようである。

雪朝大教日都福上
 三月續
 山下座
 花月夕金五難波壽中
 船吾壽海下市山座



此三及之古... 後... 終...
 日... 終...
 為... 終...
 華... 終...
 白... 終...
 終... 終...
 上上土 ① 筒 反十 布 神社

上上 ② 尾上 新七 神社
 終... 終...
 終... 終...

終... 終...

上上 ③ 終... 終...

上 ④ 終... 終...

終... 終...

終... 終...

上 ⑤ 終... 終...

終... 終...

終... 終...

終... 終...

終... 終...

Handwritten text in a cursive style, likely a list or a series of entries. The text is written vertically on the right page of the manuscript.

▲ 実地部

上上言 ① 海尾部十部 神代

Handwritten text in a cursive style, likely a list or a series of entries. The text is written vertically on the left page of the manuscript.

上上木 桐七紋 治 山下

桐七紋は、桐の葉を七つ並べ、その間に七つ並べた木を配する。桐の葉は、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。木は、葉の間に、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。桐の葉は、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。木は、葉の間に、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。

上上音 回 菱川半十布 一袋

菱川半十布は、菱の葉を半十並べ、その間に半十並べた音を配する。菱の葉は、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。音は、葉の間に、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。菱の葉は、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。音は、葉の間に、上を向いて、葉の縁を鋭く切る。

▲ 紋波之部

上上音 田 山中半十布 一袋

山中半十布は、山の形を半十並べ、その間に半十並べた音を配する。山の形は、上を向いて、山の頂を鋭く切る。音は、山の間に、上を向いて、山の頂を鋭く切る。山の形は、上を向いて、山の頂を鋭く切る。音は、山の間に、上を向いて、山の頂を鋭く切る。

山中半十布は、山の形を半十並べ、その間に半十並べた音を配する。山の形は、上を向いて、山の頂を鋭く切る。音は、山の間に、上を向いて、山の頂を鋭く切る。山の形は、上を向いて、山の頂を鋭く切る。音は、山の間に、上を向いて、山の頂を鋭く切る。

上上 田 大谷女七布 一袋

大谷女七布は、大谷の形を七つ並べ、その間に七つ並べた女を配する。大谷の形は、上を向いて、大谷の頂を鋭く切る。女は、谷の間に、上を向いて、大谷の頂を鋭く切る。大谷の形は、上を向いて、大谷の頂を鋭く切る。女は、谷の間に、上を向いて、大谷の頂を鋭く切る。

上上 圃 市川半十布 一袋

市川半十布は、市川の形を半十並べ、その間に半十並べた圃を配する。市川の形は、上を向いて、市川の頂を鋭く切る。圃は、川の間に、上を向いて、市川の頂を鋭く切る。市川の形は、上を向いて、市川の頂を鋭く切る。圃は、川の間に、上を向いて、市川の頂を鋭く切る。

上上 菱 中村長十布 一袋

○○ 爲公女及人女者三海也○○ 氏女也
用者凡其者三○○

上上 ○○ 若川○○ 若川○○

○○ 爲公女及人女者三海也○○ 氏女也
用者凡其者三○○

上 干 ○○ 小倉山二○○ 山

上 回 ○○ 市川二○○ 山

上 小 ○○ 嵐十九 ○○ 山

○○ 爲公女及人女者三海也○○ 氏女也
用者凡其者三○○

上上吉 ○○ 岩田丸二○○ 山

○○ 爲公女及人女者三海也○○ 氏女也
用者凡其者三○○

若此之山也其後山也

▲ 若女形之部

上上吉 ○○ 中村久年也

若女

○○ 爲公女及人女者三海也○○ 氏女也
用者凡其者三○○

上上 己 桐葉若秀松 林苑

上上 叶崗 己 在云 林苑

上上 林山 千菊 林苑

上上 山 千菊 林苑

上上 中村依道 八 林苑

上上 中村依道 八 林苑

評判 ふたいみつあふむ 讀本繪入
舞臺三津扇 全五冊

素人 やくしやいろまぐみ 讀本繪入
狂言 役者色仕組 全五冊

役者 やくしや 西川筆
月丸扇 繪入 全二冊

古今 ここんやくしやだいぜん
三ヶ津 古今役者大全 全六冊

秘抄 ひさし 七部書之内
耳塵集 全二冊

本丸 ほんまる
歌舞妓事始 全五冊

三ヶ津 さんかつ 大全後編
古今役者綱目 全五冊
新改正未刻

